

『小児の間食などに、飯を片手の掌にて錘〔おもり〕の形に握り、味噌などをまぶしたるをいふ。何の謂〔いい〕たるを知らず。「待て待て、いまてんのこてんのこつくってやる。』とある。

注(5) P. 604 の注(5)参照。

資料 童戯・童詞（「宮城県史」20の内。天江富弥）

方言（「宮城県史」20の内。藤原 勉）

仙台方言（「仙台市史」第6巻の内。藤原 勉）

## 90. 「鍾景閣」の名の由来

問 仙台市茂庭の、「茂庭荘」の隣の「鍾景閣」という現代的でない名称は、何から取ってつけられたものですか。

答 「仙台市政だより」1326号（昭和60年10月1日発行）に、『いま甦る武家屋敷、10月10日開館……当邸はこれから鍾景閣（旧伊達邸〔てい〕）に保存されていた第五代吉村公の扁額に由来）として運営し、市民の皆様幅広く利用していただくとともに、文化財として保存に努めていきます。』とあります。この建物は、もと、仙台市一本杉にあり、明治37年から38年にかけて建築された伊達氏の私邸であったが、昭和27年伊達氏から聖ウルスラ学院に譲渡、その後不要となったため、昭和55年、仙台市が無償寄付を受け、解体保存されていたものを、昭和60年茂庭荘敷地内に復原再築したものであります。

この建物は昭和58年仙台市の文化財に指定されたものですが、再建後市民の利用に供する施設名として、たまたま、今は松島瑞巖寺に保存されていた、伊達吉村筆の扁額「鍾景閣」の3字を、伊達家ゆかりの意味で採用されたものようであります。

この扁額の裏面には、

『享保九〔1734〕甲辰〔きのえたつ〕孟春〔もうしゅん〕望〔ぼう〕左近中将 藤吉村 』とあります。享保9年、伊達吉村55歳の1月15日の書で、この時吉村は参勤在府中であり、江戸の品川上屋敷にいた時のものであります。如何なる用途のためのものであったか、記録がないのでわかりませんが、国許仙台とは無縁のものと思えます。これが、戦中戦後の混乱期に、仙台の一本杉邸に送られ、一本杉の家屋敷が、昭和27年聖ウルスラ学院に売却される際に、瑞巖寺に入ったものようであります。

一方、一本杉の伊達氏邸は、もと、佐々豊前下屋敷でしたが、明治10年頃伊達家の仙台屋敷となっ

たものです。そして在来の建物に代って、明治37年から38年にかけて、山添喜三郎設計で新築されました。これが茂庭に復原されたものの前身であります。邸内に杉の大木があり、一本杉と呼ばれ、地名ともなっていたので、伊達氏邸を、伊達家自体、「一本杉邸」または「仙台邸」〔品川邸の呼称と並んで〕と呼んでいました。外部の市民も「一本杉の御屋敷」・「一本杉の伊達邸」とか、文人的な人達は「一杉邸」と呼んでいたものでした。

1. 「伊達家史叢談」14（伊達邦宗<sup>(10)</sup>）に

『養種園

<sup>(11)</sup>

…明治四十一年十月八日、東宮殿下、我が一本杉邸ニ行幸ノ時、養種園ノ沿革概要一部ヲ献ズ…』

『家扶作並清亮並清亮編纂家史関係書籍解題 〔中略〕

<sup>(12)</sup>

旧仙台藩治概要 活刷 一冊

明治四十一年、皇太子殿下、東北行啓ノ際、我が仙台一本杉邸ニ臨マル、乃チ旧藩ノ事蹟ヲ台覽ニ供セントシ、編纂セルモノニシテ、其ノ内容ハ領内、広袤〔こうぼう〕、及び禄高、法令、制度、田地、租税、藩臣、階級及ヒ俸禄、城郭、要害、教育、褒賞、刑罰、殖産、神社、仏閣、九章ヨリ成ル、印刷ニ付ス』とあります。

「仙台」（小倉 博。大正13）に

『保春院の東の市外の地を一本杉といひ、伊達邸あり……』。

2. 「仙台市史続編」第1巻に

『昭和二十二年八月……みちのく入りの第一夜を仙台市南小泉一本杉の伊達家邸で過ごされた陛下は……』

3. 「観光仙台市」（佐々 久。宮城県史16の内）

『一本杉

宮城刑務所の北、木ノ下の南小泉の地を一本杉というが、これは旧伊達邸内にある老杉（姥杉）から起っている。もと佐々家の下屋敷であったこの伊達邸は、今、聖ウルスラ学院の敷地となっている。……』

4. 「南小泉の史話」（相沢儀一）に、

『南小泉の元一本杉伊達邸……』

5. 「宮城県行幸誌」（宮城県）

『……南小泉一本杉の御泊所伊達家邸宅……伊達家一本杉の御邸宅……御巡幸第一夜の一本杉邸……伊達邸……南小泉一本杉の伊達家邸に東北御視察の第一夜を過され……』

6. 「仙台あちらこちら」（佐々 久）に、

『保春院のあたり

幕末には今のウルスラ高校、もとの伊達邸の地に佐々豊前の下屋敷ができた。玄関わきにはうば杉があり一本杉とよばれた。……明治維新後藩主伊達氏は仙台城をでて古城（若林城）に移った。ま

た小泉屋敷〔今の東文化の地〕にもいた。佐々も川内の上屋敷から下屋敷に移った。古城が西南戦争後の刑務所にされることになると屋敷を伊達氏に提供して笹新田に引っこみ、不動堂後藤、宮床伊達も藩主のために屋敷を提供して旧領に引きあげた。』とある通りであります。

注(1) 鐘は集める、景は景色。

注(2) P. 174 の注(4)、P. 465 の注(6)参照。

注(3) 孟は初めのこと。孟春は旧暦1月。

注(4) 望月。満月のことから、旧暦15日をいう。

注(5) 左近衛中将。正徳元年〔1711〕任ぜられた。

注(6) 本姓の藤原。藤原吉村を3字に修して「藤吉村」としたもの。

注(7) P. 12 の注(2)参照。

注(8) P. 538 の注(3)参照。

注(9) P. 97 の注(7)参照。

注(10) P. 115 の注(2)参照。

注(11) P. 537 の「184.「養種園」の名称」参照。

注(12) P. 170 の注(2)参照。

資料 伊達家史叢談 14 (伊達邦宗)

仙台市政だより 1236号

グラフせんだいNo.36

## 91. 白河以北一山百文

問 「奥州白石ばなし」(藤井武夫著)に、盛岡出身の平民宰相原敬<sup>(1)</sup>の雅号「一山」は、戊辰戦争で勝ち誇った薩長人<sup>(2)</sup>が、敗残の東北人を嘲笑した慣用語「一山百文」からとったもので、これは、明治10年、雑誌「近事評論」に熊本県人林正明が執筆した「白河以北一山百文」の表題の下の句であると記されています。この「白河以北一山百文」の全文を読みたいのですが。

答 「近事評論」<sup>(3)</sup>は、明治9年6月3日の創刊で、進歩的な政論雑誌として高い声価を得、多数の購読者を集め、明治16年5月まで刊行が続けられたものです。この「近事評論」の現存しているのは、東京大学法学部明治新聞雑誌文庫所蔵のものだけとなっています。このうちの第1-3号だけは「明治文化全集」第5巻雑誌篇(明治文化研究会編、昭和3年発行)に収録されています。

この「近事評論」第148号(明治11年)に、漂風子の執筆になる、薩長政府に対する諷刺〔ふう